

# 若き歴史学者 最後のメール

以前取材で会った若い歴史学者から今年五月、メールが届いた。処女作の刊行が決まった、ぜひ読んでほしいというものだった。

やがて『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』が御茶の水書房から出版された。西欧中心主義に陥りがちな歴史学の多元化に挑戦した、とてつもなく刺激的な本だった。

著者の保刈美さんは一橋大修士を経て渡豪。先住民のコミュニティで暮らし、人類学者の

ようなフィールドワークを通じて彼らの歴史と向き合った。

「大地が懲罰を与えた」「ケネディ大統領がコミュニティを訪れた」など、長老の昔語りを実証主義的な歴史学では受け入れ難いものばかり。従来ならあっさり排除するか、せいぜい一種のメタファー(隠喩)として扱うところだろう。しかし、彼はそうしない。

「事実」として、あるがままに受け入れようとする。本書は広範な口承の歴史に注意を向け、そうした人経験的な歴史への真摯さVとアカデミックな歴史学

は交渉関係に入るべきだ、と説く。歴史を生産構築するのは歴史学者だけではない。人たるものすべて、いや、大地や動植物、時には石までもが歴史を語るのではないか——そうラディカル

(根源的)にとらえ、彼らの歴史を自分たちの歴史として共有するハギャップごしのコミュニティションVの可能性を粘り強く模索したのである。

知の枠組みそのものをゆるがす主張には、反発もあった。一方、「歴史理解の全く異なる世界の間に対話の空間を切り開いた」(オーストラリア国立大学

のテッサ・モーリスIIスズキ教授)と、評価する声も多い。哲学者の鶴見俊輔氏も、好意的な感想を寄せた。

だが、保刈さんはもういない。家族を介して友人や仕事関係者に届けられた五月のメールは、がんのため三十二年の生涯を閉じる直前に書かれたものだった。

△声を出すだけで疲労するV状態でつづられた遺作。たとしても、感傷的な読まれ方を彼は求めてはいまい。あくまでも、若い学者がはつらつとオーストラリアの大地を駆け抜け、歴史学の限界に果敢に挑んだ書として読むべきだろう。

冒頭、△どもははじめましてVと読者に呼びかける本書は、生

命力にあふれる。「歴史は楽しくなくっちゃ」。そう言った人なつつこい笑顔が目につかぶ。彼の実践は周囲の共感を呼んだ。博士号を取得したオーストラリア国立大学では、没後に「保刈美奨学基金」の設立を決めた

(http://www.hokarimi-honoreを参照)。

△人とのつながりのなかでいまの僕があり、今の僕が支えられていますV。最後のメールにこうあった。

病すら「身体との対話」と受け止めた彼は、本書を通してこれからも多くの人々と対話を続けるのだろう。今ごろは、此岸からの語りかけに、うれしそうに耳を傾けているに違いない。

(泉田 友紀記者)